

坂尻道下遺跡

(平成元年度シノムラ化学(株)静岡工場
増設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書)



1990. 3

シノムラ化学株式会社
静岡県袋井市教育委員会

例 言

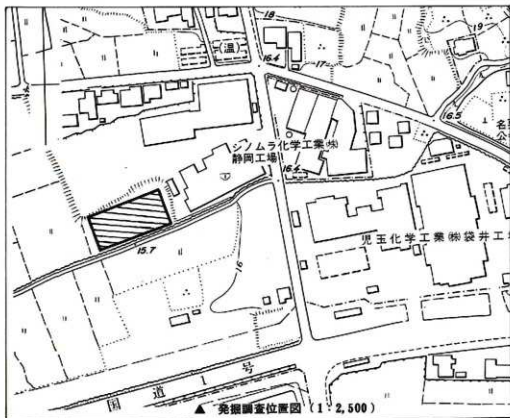
1. 本書は、平成元年6月1日～平成2年3月31日に、袋井市国本字道下796-1 他で実施した「シノムラ化学㈱静岡工場増築に伴う埋蔵文化財発掘調査委託業務」の版尻（道下）遺跡発掘調査報告書である。
2. 今回の調査は、シノムラ化学㈱静岡工場常務取締役工場長 初本 肇 を委託者とし、袋井市長 豊田舜次 を受託者とし、袋井市教育委員会を調査主体として実施した。
3. 発掘調査は、永井義博（袋井市教育委員会主任学芸員）が担当した。
4. 本報告書の執筆・編集も永井義博が行った。
5. 今回の発掘調査は、シノムラ化学㈱静岡工場の全面的な協力を得て実施された。ここに記して感謝したい。
6. 袋井市教育委員会での事務は、社会教育課文化振興係が担当した。
7. 調査資料は、すべて袋井市教育委員会が保管している。

第1章 調査に至る経過

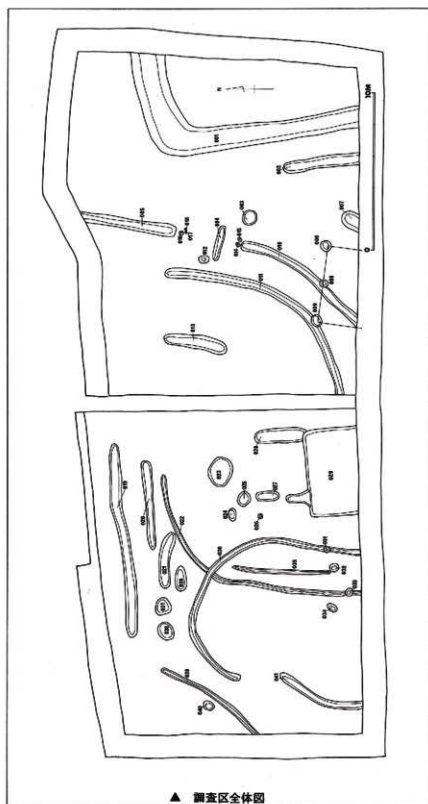
坂尻遺跡の発見の歴史は比較的浅く一般国道1号線袋井バイパスの建設予定が計画されて以降のことであった。そのため、国道1号線バイパス工事以前にこの地に開発計画を立てた場合は、遺跡の発掘調査をすることなく計画が実施されていたのが実状であった。ところが、昭和48年3月に建設省より袋井バイパスの工事に伴い静岡県教育委員会あて路線予定地内の埋蔵文化財の有無について照会が出され、その回答によれば袋井市土橋に所在する弥生時代の集落跡の「土橋遺跡」と、袋井市国本の土師器・須恵器散布地である「石ノ形遺跡（後に一部が坂尻遺跡となる）」があった。そして、昭和55年より坂尻遺跡の発掘調査が実施されてからその内容が少しずつ明らかになってきた。特にシノムラ化学株式会社静岡工場は埋蔵文化財の保護に深い理解を示し、工場増設のたびに発掘調査に協力をして下さる模範的な事業所である。今回も、計画段階からご相談をいただき埋蔵文化財の記録保存を十分に行うことができた。



▲ 坂尻遺跡の位置 (1:50,000)



▲ 発掘調査の風景





▲ 東区完掘写真（東より）



▲ 西区完掘写真（北より）

第2章 調査の経過

◎6月1日 委託契約締結日

発掘用プレハブ、仮設トイレの発注。発掘用ユンボの手配。

作業員の手配等の準備を始める。レンタカーの発注。

◎6月2日 連絡用自動車のリース開始。

◎6月4日 発掘用プレハブ、仮設トイレの建設。

◎6月5日～6日 発掘調査開始。重機により東区の表土剥ぎを開始。

◎6月21日 本格的な発掘調査の開始。東区の遺構の精査。

◎8月2日 東区の遺構実測。遺物の取り上げ。

◎8月3日～4日 重機により西区の排土移動。

◎8月7日 西区の遺構の精査。

◎8月11日 西区の完了写真の撮影。

◎8月21日 西区の遺構実測。遺物の取り上げ。

◎8月22日 現地調査の終了。器材等の撤去完了。

◎8月23日～8月31日 現地等の残務整理。プレハブ、トイレの撤去。

◎9月1日 本格的な資料整理が始まる。

◎2月26日 報告書原稿を印刷に。

◎3月30日 発掘調査報告書の完成。

◎3月30日 委託契約完了日。

第3章 調査体制

●調査計画 シノムラ化学園静岡工場

●調査指導 静岡県教育委員会文化課

●調査受託 袋井市

●調査主体 袋井市教育委員会 教 育 長 浅井通男

社会教育課長 岩崎 保

文化振興係長 小粥保夫

主任学芸員 吉岡伸夫

主任学芸員 永井義博（調査担当者）

主 事 建部千代子

学 芸 員 松井一明

●調査参加者	諸井 栄	加藤伊三郎	鈴木松蔵	中川栄吉	兼子 庫
	寺田松枝	高橋きやう	兼子鈴子	兼子 はな	萩田 はる
	岡山とく	岡山よね子	中村いた	深沢やよい	杉山鉄子
	鈴木寿美子	船越スミ子	山下悦子	山下葉子	



重機による表土の除去。



作業員により遺構の精査。



遺構001の調査状況。

遺構001の
調査状況。



遺構013の
調査状況。



遺構004の
調査状況。



第4章 調査方法

今回の調査は、南と西を水田に、東と北をガスのパイプラインに囲まれた工場建設予定地という限られたスペースのなかで実施するため、対象地を東西に2分割して発掘した。まず、重機により周囲に排水溝を設定した後、東地区より水田耕作土を除去した。水田床土を除去している段階ですでに若干の遺物が確認され、その後作業員の手により遺物の精査を行った。

今回の調査区は坂尻遺跡の西の限界に近いところで、かつて、五島康司氏によりこの周辺の試掘調査が行われた。シノムラ化学㈱静岡工場に保管されていた当時の資料によると、この付近は十数mのピッチで試掘のグリットが入っており、工場用地の3分の2が遺跡範囲で、残りの3分の1は遺跡に隣接する地域ということになる。

さて、調査区をカバーする基本グリットは、近くに基準となるポイントが残っていないため、10 mグリットを任意で設定した。これは、遺物取り上げ用のグリットも兼用している。レベルも近くに良好なベンチマークが存在しないため、通称“大郎兵衛新道”より道路用のポイントを援用した。

現地の実測図は20分の1を基本に、詳細な部分は10分の1の図で対応した。写真撮影はアサヒペンタックス6×7とニコンF Eを併用した。

第5章 地理的・歴史的環境

坂尻遺跡は、袋井市街地から約4 km東進した掛川市との市境付近である袋井市国本173の1番地他一帯に位置する。ここは油山寺一帯に広がる可憐・油山丘陵(最高115.2 m)の南東端にあたる。この丘陵は小笠原層(泥層と礫層の厚い互層)とその下に不整合で横たわる曾我層群(下部礫層、中部凝灰質砂・泥層、上部砂層)よりなる。いずれも走向、傾斜が北西―南東、南西へ5°~10°落ちの単斜構造をなし、丘陵内には沖ノ川支流のつくる大小多数の谷が発達し、尾根筋―谷筋が複雑に分布する。(加藤芳朗1985『坂尻遺跡―自然科学編一』)また、遺跡のすぐ東側は掛川市八高山を源とする原野谷川が古岡の丘陵にそって南下し大きく西に流れを変えるところである。この変換点あたりは、掛川市から流れてくる逆川、垂木川等の合地点でもある。

河川の周辺は肥沃な沖積平野で、砂層、泥層、礫層が交互に厚く堆積しており、上流の山地で掛川層群と呼ばれる上部新第三系泥砂礫層からなる低地性丘陵を解析してきた結果である。

現在の坂尻遺跡周辺は河川改修によって現原野谷川の流路は南西向に直進するが、原川、徳泉、上賀名にはもとの蛇行流路の跡が残っている。このような蛇行流路の発達はこの付近の川の流れがゆるやかだったことを示すものである。加藤芳朗氏は坂尻遺跡の調査で遺跡内をかつて流れた旧流路「古名栗川」の存在を指摘し、その流路の両側の自然堤防上(礫層)に古墳時代の坂尻遺跡のムラがあったことを推定した。これは古墳時代の坂尻遺跡のムラの範囲をつかむうえでも、また集落形成の過程を知るうえでも非常に重要なことであった。

今回の出土遺物の中心である古墳時代の後期にはこの自然堤防上にムラが営まれ、遺跡西側

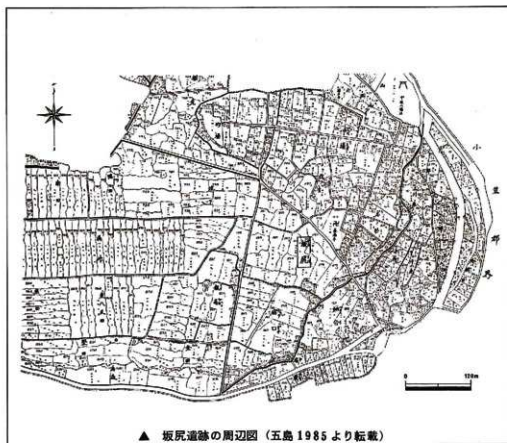
の後背湿地に位置する水田地帯を生活範囲としていたのであろう。また板尻遺跡の北へ220 m 入った谷は有名な「菅ヶ谷横穴群」の墓域である。現在はこの横穴群は袋井ゴルフ場の敷地内でわずかにその姿をのぞかせているが、かつてはこの平野に栄えたムラの「奥津城」となっていたと考えると古墳時代の板尻遺跡周辺の開発の早さが十分推定できるであろう。

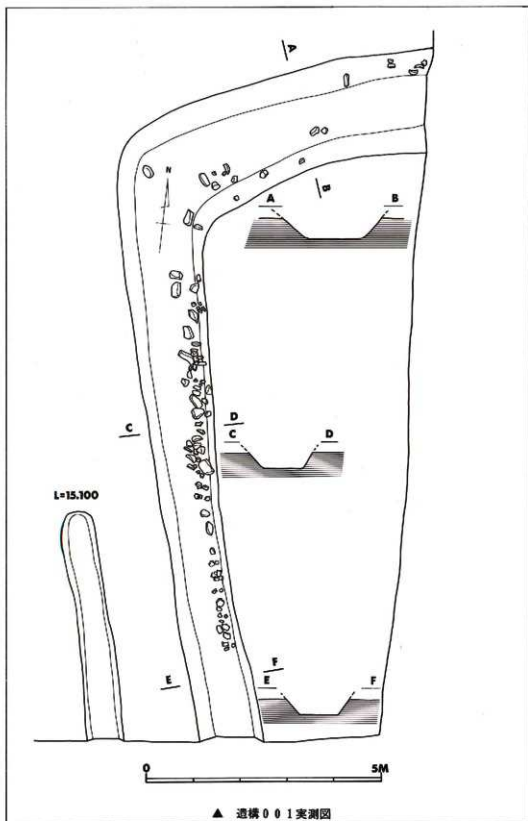
第6章 遺構の概要

今回の調査区は約1,200 m²の広さであるが、先にも述べたとおり板尻遺跡の中心からやや離れた地域にあるため、遺構の検出状況も比較的希薄な状態であった。遺構は、溝状遺構、pit、竪穴状遺構などが中心である。調査した西区の北側及び西側はとくに遺構の検出が少ないところであった。これも、以前に実施された試掘調査の結果と一致する状況である。これらは、下図の小字名「道下」と小字名「鴨田」「溝地」との微妙な畦畔の違いから土地の高低差を読み取り遺跡（集落と水田跡など）の範囲を推定できるのかもしれない。

溝状遺構 001

この溝状遺構は東区の南東隅で検出された今回の調査のなかでは比較的良好な残りを示す遺構である。溝の規模は、A—Bラインで幅2.10 m、深さ45 cm。C—Dラインで幅1.40 m、深さ35 cm。そしてE—Fラインで幅1.40 m、深さ35 cmを測る。遺構は鍵型に曲がり、調査区の



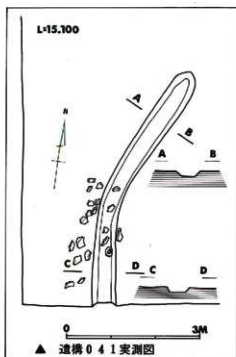




▲ 遺構001完掘写真（南より）



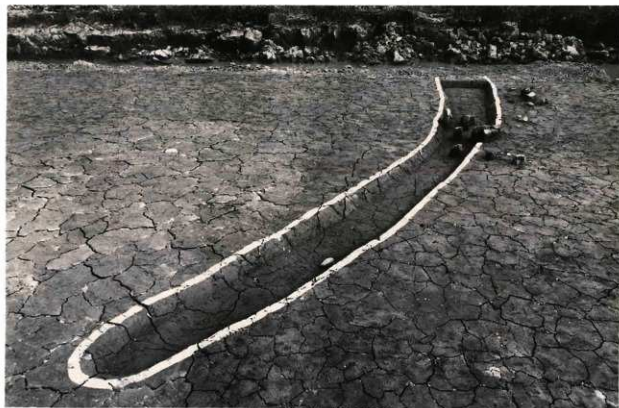
▲ 遺構001完掘写真（北より）



さ 35 cm。そしてE-Fラインで幅1.40 m、深さ 35 cmを測る。遺構は鍵型に曲がり、調査区の東側に延びているため詳しい状況は不明であるが建物跡または広場を取り囲む堀のような機能を果たしていたのかもしれない。覆土は、やや青みがかった粘土質の土であったが、この中より出土した遺物はすべて溝が取り囲んでいる中心部から流れ込んだ状況を示している。遺構確認面のレベルが低かったため実際には溝の幅は広く、深さももう少しあったものと思われる。

溝状遺構 041

この溝状遺構は西区の南西隅で検出された遺構である。溝の規模は、A-Bラインで幅55 cm、深さ20 cm。C-Dラインで幅55 cm、深さ20 cmを測る。遺構確認面が低かったためこの程度の規



▲ 遺構 041 完掘写真

横にしか図化できなかったが、実際には一回り大きな溝でさらに北側にも続いていたと思われる。緩斜面に作られた溝を水田耕作時に水平に削平したためこのような検出状態となったのであろう。調査中にこの溝が坂尻遺跡の北西限界を示すような感触を受けた。出土遺物は土師器、須恵器等である。

溝状遺構 004

東区で検出されたこの遺構は、溝状遺構 005 と溝状遺構 010 の途切れた間に、それらの溝と直行する状況であった。遺構の長さは、東西方向に 2.30 m、幅 50 cm、深さ 20 cm を測る。遺構内に流れ込む形で若干の遺物（土師器・須恵器）を出土する。

溝状遺構 013

同じく東区内で検出された遺構であるが、主軸を南北方向にとる。遺構の長さは、全長 4.20 m、幅 90 cm、深さ 20 cm を測る。溝の北側に炭化物といっしょに若干の遺物（土師器）を出土する。炭化物の分布範囲は約 90 cm 四方である。

土壌状遺構 009

東区内に溝状遺構 011 と重複して検出された。直径 85 cm、深さ 15 cm の皿状の遺構である。遺構内には、まるでムシロを焼いたような植物質の繊維を織ったものが炭化物として残っていた。この遺構は、大雨のため調査中に水に浸かり残念ながら炭化物の分析はできなかった。

井戸状遺構 003

東区で検出された直径 1 m、深さ 60 m の井戸状の遺構である。覆土は、古墳時代の遺構の土と異なり奈良・平安時代以降の土であった。出土遺物は土師器質の小片が 1 点あるのみである。

今回の調査区の南側でかつて工場建設（大庭塗装工業所）に伴う発掘調査が実施されたり、国道 1 号線の南北でバイパス工事に伴う発掘調査（財団法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所が実施）が行われ、数多くの遺構・遺物が検出されている。しかし、有機的に関連を持つ結果は残念ながら発見できなかった。また、調査区の南側の大井川用水と並行して走る小道は、地元の人の証言によると国道 1 号線が開通する前は北原川に通じる重要な交通路のひとつであったとのことである。現在ととても関係ないようであるが、小さな脇道に歴史の謎を解くカギがあるのかもしれない。



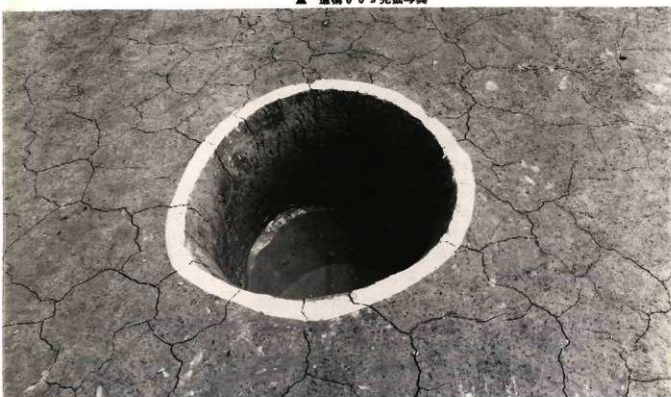
▲ 遺構004完掘写真



▲ 遺構013完掘写真



▲ 遺構 009 完掘写真



▲ 遺構 003 完掘写真

第7章 遺物の概要

遺物実測図は(1)(2)合わせて22点を図化した。

出土遺物実測図(1)は古墳時代の遺物を中心に掲載した。1～8は須恵器の遺物を、9～19は土師器の遺物を載せた。このうち溝状遺構001の出土は3、11、13、14である。おもな遺物では、4が溝状遺構030の出土、10が溝状遺構013の出土、12が堅穴住居跡状の遺構029の出土である。その他の遺物は、水田耕作土、または包含層状の上のたまり(しり)からの出土品である。遺物は完形のもの無く、すべてが図上復元したものである。

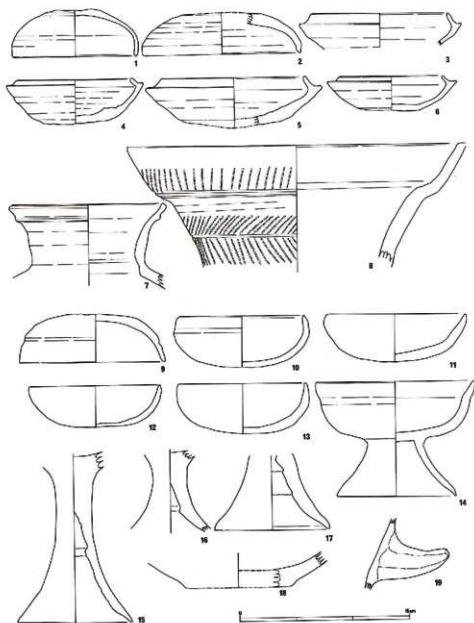
1、2、9は坏蓋、3～6、10～13は坏身である。7、8、18は甕の口縁部から頸部にかけてと底部の破片である。14～17は高杯の破片である。19は把手付の甕または甕の破片である。全体的に古墳時代でも比較的新しい時期のものが多い。

出土遺物実測図(2)は特殊な遺物を中心に図化した。1は縦4.50cm横2.50cm厚さ1.30cmの石製品である。遺物の上部に三方向より空けられた直径約4mmの穴をもつ。材質は蛇紋岩製と思われる。用途は不明である。2も同じく蛇紋岩製の紡錘車である。直径3.10cm、厚さ1.30cmを測る。穴は上下からそれぞれ空けたらしく途中で食い違っている。古墳時代の遺物と考えられる。国1バイパスの調査(五島1985)でも1点出土している。3は9世紀代のものと思われる獣足付短頸壺の獣足部分である。同じく国1バイパスの調査では胴部・頸部をふくめて出土している。

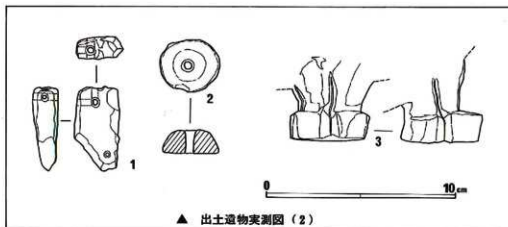
第8章 まとめにかえて

6世紀後半の遺物・遺構を中心とした今回の発掘調査の結果は、古墳時代の板瓦遺跡の集落域を考える上で重要な調査であったといえる。そして、西側に広い水田域を持つ可能性も十分考えられる遺構の検出状況である。その点については、今回の調査区の南80mで本年度発掘調査の行われた国1袋井バイパス関連の結果が注目されている。ここでも、集落としての西側の範囲は板瓦道下遺跡とほぼ同じ位置で消え、続いてその西で各時代にわたる水田跡が検出されている。最近の静岡県内の調査でも弥生時代、古墳時代、奈良・平安時代、中世と各時代に渡っての水田跡の検出が盛んで次々と画期的な成果を上げている。この付近一帯での成果は国1バイパスでの報告を待ちたい。古墳時代の遺構としては、東区で検出された溝状遺構001が今回の調査の中では特筆される。遺構上部を水田によって削平されてしまっているが幅2m以上、深さ1mの溝を周囲に巡らす遺構は興味深い。残念ながら遺構の中心は調査区外であり溝の一辺の長さも確認されていないが、中心部の土は数回にわたり削平・盛土をされた痕跡がある。溝内の出土品が遺構の中心側から投棄または流れ込んだ状況を示している。溝の覆土の堆積状況は速い流れをもたないよんだ水を示し、またこの付近の遺構では特に遺物が集中しているなど注目する遺構であろう。

奈良・平安時代の官衙遺跡としての板瓦遺跡の遺物もわずかながら検出される結果であった。いままで、板瓦遺跡の奈良・平安時代の遺構・遺物は、信号「国本」の東側でソバ屋「以津美



▲ 出土遺物実測図



屋」付近を中心に検出されてきた。さらに、1986年にシノムラ化学の工場増築に伴っての発掘調査でも、小松フォークリフト整備工場建設に伴っての発掘調査でもこの時期の遺物はあまり出土せず、官衙遺跡としての坂尻遺跡は原野谷川に寄った比較的狭い範囲見られてきた。今回の調査でも、その考えを否定する遺構・遺物は検出されず、わずかに出土したこの時代の遺物は、調査区の近くを通る交通路または水路などの関連で出土したものと考えている。

さて、シノムラ化学柳静岡工場は本調査の終了後に、今回の工場増設に関連しての遺跡内での小工事についても、右の写真のとおり確認調査を実施してから取り掛かって下さっている。右ページの上から、ケーブル埋設部分の確認調査、コンクリート舗装部分の確認調査、機器設置部分の確認調査である。これにあたってはシノムラ化学柳静岡工場と施工する東栄建設の協力を得ている。袋井市の埋蔵文化財保護行政への協力に對し感謝したい。

（袋井市教育委員会 永井義博）



平成元年度 シノムラ化学㈱静岡工場
増設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

坂尻道下遺跡

1990年3月30日

編集 静岡県袋井市教育委員会©
袋井市新屋一丁目1番地の1
TEL 0538 (43) 2111

印刷 (有) デザイン エム・エス・シー
オフィス

袋井市久能1977の7
TEL 0538-(42) 3164